

# アイルランド人ラグビーコーチから見た『JAPANESE RUGBY』

— パットンの小著考 —

三 神 憲 一  
溝 畑 潤  
道 上 静 香

## 1. はじめに

ジム・グリーンウッド<sup>1)</sup>に『日本ラグビー見たまま』というレポートがある<sup>2)</sup>。四半世紀前に日本ラグビーフットボール協会の機関誌に掲載されたものである。このレポートの中でグリーンウッドが指摘したことは、主として施設・設備面の不足と練習内容についてである。

前者については、「日本においては、試合や練習がグラウンドのコンディション（状態…雨天の場合は水浸し）や気象条件に全く関係なく行われるという無頓着さ」を不思議がり疑問を投げかけている。この疑問がごく自然なものであることは、1980年に来日したイングランド代表チームのコーチ陣やマネージャーが、日本の普通のラグビー・グラウンドで試合するのを「丁重にしかし断固として拒否した」<sup>3)</sup>という事実が雄弁に物語っている。その理由は、「芝生」が生えているのがラグビーのグラウンドであり、土のグラウンドでの試合など一度も体験したことがなかったからである。

後者については、恐るべき練習量の多さと単調さを、「走る、走る…だけの練習」<sup>4)</sup>と揶揄するとともに「次の日も同じパターンの練習、そして次の日も、また次の日も同じである。一週間後また同じ練習が続いた。その後この方法は筑波大学ばかりでなく、対戦した他の大学チームも同じことをやっていると知って驚くばかりであった」<sup>5)</sup>と述べている。そして総括的には「日本では質よりも量の方がずっと重要であり、体を動かすことの方が—たとえそれがどんなものであれ—頭を使うよりも大切だということであった」<sup>6)</sup>と痛烈に批判している。このような批判の背景に、イギリスと日本の社会習慣や価値観の相違を認めることは容易であるが、『対話』や『議論』を通じて方針や行動を決定するという西欧社会のルールが、日本では適用されない」と述べていることよりグリーンウッドのラグビーに関する“カルチャー・ショック”の大きさを読み取ることができる。そして批判の根底には、「日本人独特の集団帰属意識—個人よりも集団が先行する—は西欧人には全く理解しがたい」という思いが流れている。

1) ラフバラ工科大学の上級講師で、スコットランド・ラグビーチームの代表としてテスト・マッチ（国対国の試合）を20回、全英代表チームのキャプテンをも務めたトップ・プレーヤーである。またナショナルチームのトップ・コーチを歴任し、1979年に筑波大学の客員教授として招聘され、同大学のラグビー・コーチを引き受けた。

2) ジム・グリーンウッド：“日本ラグビー見たまま”，RUGBY FOOT BALL（日本フットボール協会），Vol.29, pp.27-31, 1980.

3) 中村敏雄：“スポーツの風土”，大修館書店，p.203, 1982.

4) ジム・グリーンウッド，前掲書，p.27, 1980.

5) ジム・グリーンウッド，前掲書，p.27.

6) ジム・グリーンウッド，前掲書，p.27.

グリーンウッドに遅れること約 20 年を経て、マイケル・パットン<sup>7)</sup>が三菱重工長崎の特別社員として来日した。パットンは同社の社会人ラグビーチームのコーチを務めるかわら、長崎県内の高校ラグビーのコーチを兼任し熱心な指導にあたっている。

パットンもまたグリーンウッドに優るとも劣らぬ経歴の持ち主であり、オックスフォード大学在学中にはオックスフォード大学対ケンブリッジ大学の競技スポーツ対抗試合であるパーシティー・マッチに出場している<sup>8)</sup>。パーシティー・マッチの中でも特にラグビー・マッチとボート・レースはイギリスの全国紙の年間主要スポーツ行事一覧に日付が明記されるほどの国民的行事であり、出場者には「ブルー」<sup>9)</sup>という名誉ある称号が与えられる。ラグビーでこの称号を授与された者の多くはイングランドを中心に国代表選手や各協会の主要な役員となり、ラグビーのルールや理論の発展に尽力するとともに英国外におけるラグビーの普及・発展に大きく寄与している。来日後、パットンは自らの実績と体験に基づく卓越したコーチング理論と指導法により、短期間のうちに長崎県からの代表校を全国高校ラグビー大会の準優勝等に導き、長崎を全国的にラグビーレベルの高い県にした。

このようにラグビーのトップ・プレーヤーとしてまたコーチとして類い稀な資質を発揮したパットンは、実際に高校生とはいえ、日本人選手から成るラグビーチームの指導とその強化に具体的な実績を残した数少ない外国人の 1 人である。そのパットンが日本におけるラグビー：コーチング・マニュアルの必要性、日本の教育システムとスポーツ、発育・発達に応じた望ま

しいコーチング方法、日本ラグビーの現状に対する批判などに関する『JAPANESE RUGBY』という小論を著している。

グリーンウッドが、関東という日本の中心において見聞き感じ取った当時の日本（主に大学）ラグビーの現状と課題について論述したのに対して、パットンのそれは長崎県という一地方から見た日本ラグビーに関するものであり、地理的・時期的にも隔たりがある。それゆえ、パットンの目に日本のラグビーがどのように映ったのかを検討することは、日本のラグビーの将来にとって重要である。

本稿ではパットンの『JAPANESE RUGBY』を詳細に検討することにより、地方からみた日本ラグビーに対する本質的な特徴を明らかにすると共に、この小論が日本のラグビー競技のあり方に対して占める位置、及びその役割について考察する。なおこの小論は公刊物ではないので、著者の許しを得て日本ラグビー界の将来を展望するうえで、重要と考えられる「高校ラグビーについて」までを本稿中に逐一記載しながら考察を加える。

## 2. ラグビー教育と発達

パットンは『JAPANESE RUGBY』の冒頭においてこの小論を主張する有効性について次のように書いている。

At the beginning, it is important to say that the observations made in this report, are based on a relatively limited experience of Japanese Rugby. It is fair to say that many observations

7) アイルランド出身。オックスフォード大学在学中の 1991 年と 1992 年にはオックスフォード大学対ケンブリッジ大学の競技スポーツ対抗試合であるパーシティー・マッチにキャプテンとして出場した。同年に実施された学生ワールド・カップにおいてもアイルランド代表のキャプテンとして出場し、チームを世界のベスト 8 に導いた。1996 年にはラグビーユニオン（15 人制）のプロ化に伴いプロに転向、1999 年に実施されたヨーロッパ選手杯（ヨーロッパ・カップ）で優勝するなど、1990 年代に世界の桜舞台で活躍したトップ・プレーヤーである。

8) 山本巧（鈴木秀人 編）：“青いスポーツエリートたち”，『スポーツの国イギリス』創文企画，p.165，2002。

9) 山本巧（鈴木秀人 編），前掲書，p.178，2002。

will be generalizations and there may well be inaccuracies included. Due to the location of my work, much of my knowledge of Japanese rugby has been leaned in Nagasaki-ken, and of course every ken in Japan has different rugby structures, but, by and large, most of the opinions offered in this report will apply to most of Japan.<sup>10)</sup>

はじめにパットンは、自己の小論が比較的限られた日本ラグビーの経験に基づき見聞し、感じたところをまとめたもので、その見方は一般的ではあるが、正確でないことも含まれているかもしれないと断っている。さらに、長崎を本拠地にするチームのコーチという立場にいたので、彼の日本ラグビー観は長崎県で知り得たものであるとも断っている。しかし都道府県ごとに独自のラグビー組織体の存在を十分認識した上で、この小論で述べている意見が全般的には日本のラグビーの大部分に当てはまると言う。

大した自信である。以下、この小論を詳細に検討することにより、述べられている内容が日本ラグビーの抱えているいくつかの問題点について、正鵠を射ていることを示す。

#### 1) コーチングマニュアル／文献

パットンは西欧州やオーストラリアなどのラグビー強豪国<sup>11)</sup>は独自のコーチングマニュアルを発行しており、誰もが容易に入手可能であること、そしてそのマニュアルが定期的に更新されることを述べ、アイルランドのコーチングマニュアルの具体例について次のように書いている。

... In my home country Ireland, we have Levels 1-4 rugby coaching manuals, available to everyone and regularly updated as rugby constantly changes.

Level 1 deals with the very basics of the game e.g. passing, catching, tackling, the scrum etc and is aimed new coaches, particularly schools' coaches.

Level 2 deals more with team play, defense patterns and higher level skills training and is aimed at more senior schools' coaches and club coaches.

Level 3 deals more with higher level team play, game plans, video analysis and higher level skills training and is aimed at very senior club coaches, provincial coaches and rugby development officers.

Level 4 deals with very high level coaching and is aimed at provincial/international coaches and senior rugby development officers.

In addition to this, there are many other smaller booklets and publications, dealing with different levels of players, referees, understanding of rules, safety etc. . . . However, because presently, there are no such coaching manuals, it means that there is no common level of skills taught to all Japanese Rugby Players. In addition to this, coaches have no common guidelines or information to refer to, when it comes to coaching the basic skills of rugby. What I have experienced all too often in Japan, is that many players, who have played rugby for several years, cannot perform the basic skills of rugby at high school or university, because they have never been taught

10) マイケル・パットン 『JAPANESE RUGBY』, p.1, 2000.

11) 過去5回のワールドカップの戦績から見ると、現在、世界の強豪国と言われているのはオーストラリア、ニュージーランド、イングランド、南アフリカ、フランス、スコットランド、アイルランド、ウェールズなどである。

properly! I believe this is a direct result of a lack of coaching manuals.<sup>12)</sup>

パットンの出身地アイルランドでは、階層的に構築されたレベル1～4までのコーチングマニュアルがあり、それらは誰でも利用できる。

レベル1ではラグビーのきわめて基本的なプレー（パス、キャッチ、タックル、スクラム等）を中心に、その対象を主に学校の指導者にあてている。

レベル2ではチームプレーにおけるディフェンスパターン、高いレベルのスキル・トレーニングを中心に取り扱い、対象をシニアの学校指導者やクラブコーチとしている

レベル3ではより高度なチームプレー、ゲームプラン、ビデオ分析を取り扱い、対象をシニア、州レベルのクラブコーチ、そしてラグビー・デベロップメント・オフィサー（R.D.O., Rugby Development Officer）を対象としている。

レベル4ではトップレベルのコーチングを取り扱い、州代表レベルや国際レベルのコーチ、ナショナルレベルのR.D.O.を対象としている。

他にプレーヤーを対象としたルールの理解や危害防止、安全対策に関する小冊子や刊行物を発刊している。

そしてパットンは、現時点で日本にはアイルランドのようなコーチングマニュアルがないことが、日本のラグビー選手に共通した基本技術の欠如となり、また高校や大学において正しい指導ができないためにゲームという一番大切な場面において基本プレーができていないと指摘している。

現在、日本には各年代層を対象としたコーチ

ングマニュアルというものはないが、ナショナルチームやトップリーグの指導者およびコーチのレベルを向上させるための指導者資格制度の構築にむけての取り組みが2003年度からはじまっている。

## 2) コーチングコース／セミナーとコーチ評価

さらにパットンは、日本（長崎県）におけるコーチ育成トレーニングに参加した経験に基づき、日本ラグビーが抱えている構造上の問題について次のように言う。

Every summer in Ireland, the Irish Rugby Football Union run a series of coaching courses. There are courses for Levels 1-4 coaching manuals, which are taken by senior development officers and senior coaches. Indeed, sometimes specialist coaches are invited to teach on their area of expertise e.g. scrum or defense. These courses are usually held from Friday evening to Sunday evening. There are also specialist courses held for all levels of schools' coaches.

Further to this, the coaches, who attend these courses must then keep a practice diary for the next year for 40 practices and at some time during the following year, a development officer from the Irish Rugby Football Union will come to one of the coach's practices and assess him. The development officer will then talk to coach about his strengths and weaknesses and then send a report to the Irish Rugby Football Union.

I cannot comment on the rest of Japan, but in Nagasaki, coach/teacher education in rugby is virtually non-existent. Every year, there is one weekend held by the Nagasaki Rugby Union

12) マイケル・パットン, 前掲書, p.2, 2000.

for the education of coaches. Apart from the organization and choice of coaches to take this coaching course, the Nagasaki Rugby Union has very little control over what is actually coached at this weekend. For example, two years ago, I took the training at this particular weekend. Last year, a completely different group of coaches took this weekend and this year, I was asked 10 days before the same event, if I was able to take the training again. I was unable to do it, but it demonstrated to me a complete lack of training and organization for what should be a very important weekend. The fact that there is no continuity in the training from year to year is a direct result of no official Japanese coaching manuals and a complete lack of structure in Japanese Rugby.<sup>13)</sup>

アイルランドでは毎夏、アイルランド・ラグビーフットボール・ユニオンが、レベル1～4までのコーチングマニュアルに沿ったコーチングコースを主催していることを述べ、各コースの受講方法やその厳格な内容（コースに参加したコーチは次年度から必ず40日間の練習レポートの義務付け等）、および受講者に対する開示された明快な評価について述べている。さらに、パットン自身自身が参加した日本（長崎県）のコーチ育成トレーニング体験に言及し、コーチ育成に対する形式的な協会の基本姿勢を批判するとともに、その主たる要因が前述のような公式なコーチングマニュアルがないという日本ラグビーの構造上の欠陥にあると指摘している。

このことは長崎県だけでなく、実際には他の

都道府県において同じような課題であるということができ、2004年から定期的に行われているコーチング講習会のあり方も頂点だけを眺望するのではなく、地方においては、より底辺部に力点を置いた具体的な普及、振興策が急がれる。

### 3. 日本の教育システムとスポーツ

冒頭、パットンは言う、

Many of the problems that in Japanese Rugby are a direct result of the Japanese educational system, which will naturally be very difficult to change.<sup>14)</sup>

日本のラグビーのかかえる多くの問題は、極めて変化に乏しい（変りにくい）教育システムにあると。

そして、彼の目からみた日本の学校教育システムとスポーツの関係について以下のように述べている。

Although sport is played in schools, from Junior High School onwards, students must choose one sport, which is a club activity and not part of the school curriculum. In my opinion, too much time is spent practicing, often badly, and not enough time playing their chosen sport.<sup>15)</sup>

日本では主に中学校からクラブ活動としてのスポーツを行うが、生徒は1つのスポーツだけしか選ぶことが出来ず、しかも生徒が行おうとするスポーツは学校の正課として実施するカリキュラムとしてではなく、課外活動の一環として行うものである。さらに付け加えるならばその方法は、練習に

13) マイケル・パットン, 前掲書, p.2, 2000.

14) マイケル・パットン, 前掲書, p.2, 2000.

15) マイケル・パットン, 前掲書, p.2, 2000.



費やす時間が長く、生徒自身が選択したスポーツをプレーする十分な時間がない。

パットンのこの指摘は、四半世紀前に来日したグリーンウッドが、日本の大学ラグビーの練習方法をいみじくも「走る、走る……だけの練習」と痛烈に批判したことと本質的に同じである。「練習のための練習」とも言える形式の練習方法が、スポーツを親しみ、楽しく行うことが一番大切な中学校というスタート段階で、現在でも継続的に行われているという現状を憂慮している。

次いで、アイルランドと日本の教育カリキュラムの相違とアイルランドの教育システムの利点（長所）について、自己の今日までの体験の中から見た観点で論じ、日本の中学校におけるスポーツについて注文をつけている。ここでは、サッカー、ラグビー、クリケットといったイギリスで生み出されたチーム・ゲームを柱とする「ゲーム」の領域を、カリキュラムの中で非常に重視しているナショナル・カリキュラム<sup>16)</sup>を多分に参考にしながら考察しているようである。

In Ireland, high schools are generally from age 11-18. There is a winter season from September to March and a summer season from April to June. In my high school, students could choose one from a choice of three winter sports, rugby, hockey or cross-country running. In the summer season, students had a choice between cricket and track and field. July is no organized study or practice but the students are free to practice by themselves. However, the main difference between Ireland and Japan is that sport is part of the school

curriculum and not a club activity.<sup>17)</sup>

アイルランドにおける高校の年齢は11～18歳である。パットンの高校時代には、生徒はラグビー、ホッケー、クロスカントリーのうちから1種目を冬季（9～3月）に選び、夏季（4～6月）にはクリケットと陸上の中から1つ選択できたと述べ、幅広いスポーツ種目の中から自分の好きな種目を選ぶことが出来る有利さを説いている。そして日本との比較の中で一番の相違点は、スポーツが学校教育カリキュラムの一環として位置づけられ、決して課外におけるクラブ活動ではないことを強調している。

図1-1、図1-2は（主としてイングランド、ウェールズの）1995年および2000年版のナショナル・カリキュラムの体育である<sup>18)</sup>。この特徴は、5～16歳までの11年間における義務教育期間が4つのステージ（Key Stage）に区分されていること、および、「学校内容（Program of Study）」と「到達目標（General Requirements for Physical Education）」が、身体活動と健康的なライフスタイルを促進し、身体活動をめぐる積極的な態度を育て、安全な実践を保証することである。年齢段階に応じて学習すべき具体的な内容は、ゲーム・体操・ダンス・陸上競技・野外活動・水泳という多彩な運動領域から構成されている。なかでもチーム・ゲームだけは、ゲームという名称で4つのステージ全てにおいて必修と指定されている唯一の運動領域であることが特徴的である。このようになぜゲームがイギリスの教育カリキュラムにおいて重視されるのか、その理由を国家遺産省（Department of National Heritage）の刊行文書『Sport Raising the Game（1995）』<sup>19)</sup>に見ることができる。そこで

16) 主としてイングランドとウェールズであるが、北アイルランドもこれに類似している。

17) マイケル・パットン、前掲書、pp.2-3, 2000.

18) 鈴木秀人：「プレイ・ザ・ゲーム」、『スポーツの国イギリス』創文企画、p.13&p.27, 2002.

19) 鈴木秀人、前掲書、p.15, 2002.

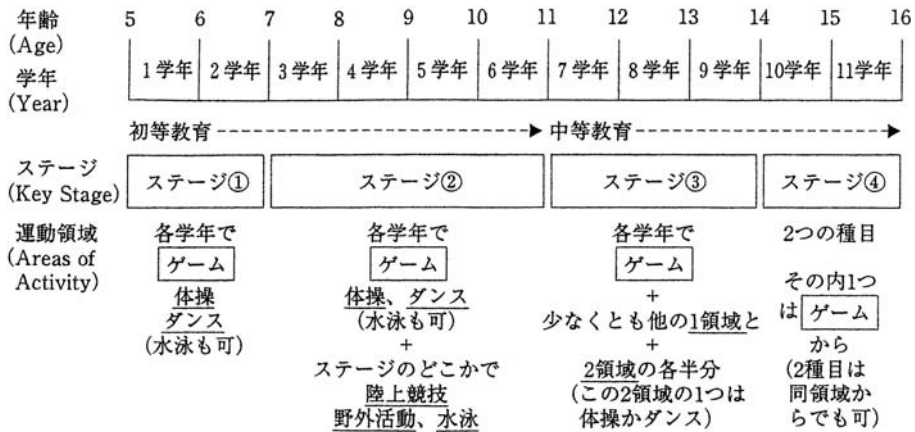


図 1-1 ナショナル・カリキュラムの体育（1995年版）におけるゲーム及びその他の運動領域の扱い

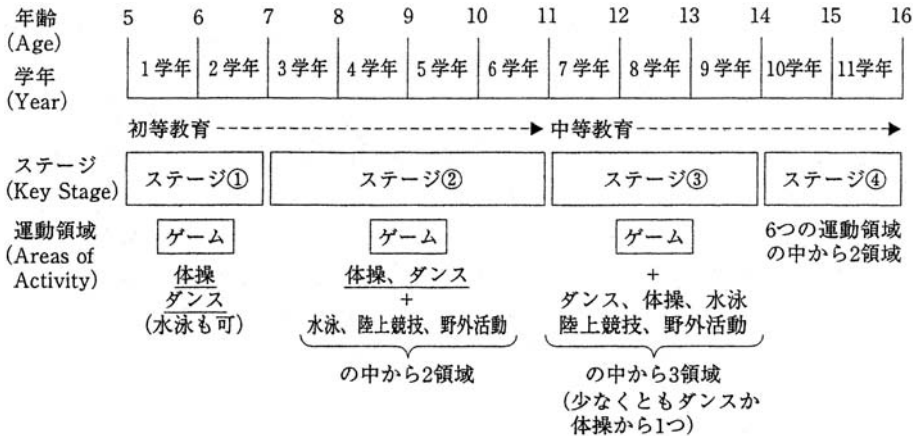


図 1-2 ナショナル・カリキュラムの体育（2000年版）におけるゲーム及びその他の運動領域の扱い

は、ゲームの趣旨と重要性について次のように説いている、

「フェア・プレー，自身の統制，他者への尊重，規制に従って生きることを学ぶ，そしてチーム内で他者に対して果たすべき自身の義務を理解する，... 全ての子供にとって体育カリキュラムの必修事項」。

また、イギリスの著名な体育史家であるマッキントッシュ (P. C. McIntosh) は、その代表的な著作『PHYSICAL EDUCATION IN ENGLAND SINCE 1800』において、「19世紀のイギリスに

2つの異なった体育の伝統が形成された」ことを先ず指摘している。伝統の一つは私立の中学校であるパブリック・スクールで盛んになっていたフットボールやクリケットといった組織ゲーム (Organized Games) を指し、もう一つの伝統は公立の初等学校で教えられた体操 (Gymnastics) や軍事教練 (Military Drill) などの活動を指す。やがてこの2つの異なる体育の伝統が次第に統合されていったことを明らかにし、最終的にはパブリック・スクールの組織ゲームに起源がある「競争的スポーツ (Competitive Sport)

が体育において確固とした極めて重要な内容であり続けている」という結論を導いている<sup>20)</sup>。

以上のように、パブリック・スクールで行われていた伝統的組織ゲームがイギリスの学校体育カリキュラムにおいて今日まで優先的な地位を占めているという現実を踏まえつつ、アイルランドにおける教育システムの具体的内容を見てみよう。ここでパットン<sup>21)</sup>は、アイルランドの教育システムの利点（長所）として、決して指導コーチからの強制ではなく全ての生徒が自分に合った能力レベルでプレーを楽しみ、練習できる点を指摘している。

Therefore all students have practice from 2-4pm on Mondays and Wednesdays and then either another practice or a practice match against another high school on Saturday mornings. Until the age of 15, all students play within their year group and there are easily enough players to have at least two teams for each year group. From age 16-18 (the equivalent of Japanese High School), my school had five senior teams and every student is able to play on a team suitable for his level of ability. Also, by the age of 16, every student will have had at least 4 years experience of playing rugby.

Another important factor is that until the age of 15, Irish High School Students do not play tournaments. From the age of 11, the students play against another school in a friendly but competitive match every Saturday and often all they do during practice is play matches rather than practice skills. Gradually they develop an understanding of the game of rugby as well as its rules, but at no time under any pressure to win. They, with their team-mates

develop their own desire to win. There is no substitute for having a lot of match-playing experience. No matter, how much you practice, you can only learn many of the more important rugby facets, if you play matches.<sup>21)</sup> 組織ゲームや他のスポーツが行われるのは週の中で月・水の2時間が中心であり、土曜日の朝は練習か他の高校との練習試合を行う。……彼の出身校では（日本の高校に相当する）16～18歳時には5つのシニアチームがあり、全員が自分の能力レベルを選択してチームプレーができる。そして16歳になるまでには最低でも4年間のラグビー経験を持つことができることである。もう一つの重要な要因はアイルランドの高校生は決してトーナメントでゲームを行わないということである。11歳から他校との親善試合を毎週土曜日に行い、スキル練習中心ではなくゲーム形式練習を多く実施し、実践の中でゲームやルールの理解を高めるといった形式をとっている。この方法であれば精神的な重圧がほとんどなく、より多くの試合を経験することによりチーム内の向上的なディスカッションがスムーズに行われ、勝とうとする情熱が自然と醸成されてくる。どれだけ練習を積もうとも、試合をしなければラグビーの多くの重要な事を学ぶことはできない。

さらにパットン<sup>21)</sup>は、視点を変えてラグビーシーズン以外における他のスポーツ種目との併用とその効果・必要性についても以下のようにも言及している。

In the summer season, many rugby students, particularly backs players, choose track and field as their summer sport and are able to

20) 加藤橋夫、田中鎮雄 訳 (MacIntosh 著) : “近代イギリス体育史”, ベースボールマガジン社, p.222, 1973.

21) マイケル・パットン, 前掲書, p.3, 2000.



work on their speed and strength for the new rugby season. However, high school students are free to play other sports on the days when they are not playing rugby or track and field. Many students in Ireland represent not only their school but even their province or country in two or more sports. I believe that experience in other sports does benefit the student in his main sport.<sup>22)</sup>

アイルランドの多くのラグビー選手は、夏シーズンのスポーツとして陸上競技を学ぶ。選択理由は、新しいラグビーシーズンに備えてスピード・瞬発力・持久力の強化のためである。ラグビーや陸上競技をしない日には他のスポーツを行うことも可能である。他のスポーツを経験し、親しむということは自分のメインスポーツに必ず有益になる。

そしてパットン、日本の硬直した現行のカリキュラムの中で行われるクラブ活動に対して、声を大にして次のように言い切っている。

In Japan, students can only choose to play one sport as a club activity and generally players practice every day but don't play enough matches. Also many students begin a totally new sport at the age of 16. Having coached in a Japanese High School for almost three years, I have to say that one of the most frustrating things I have experienced is coaching so many players, who are playing rugby for the first time. Although I am constantly amazed at how quickly they learn the skills of the game, it takes them so much longer to really understand the game.<sup>23)</sup>

日本では、生徒はクラブ活動として1つの

スポーツしか選べず、毎日激しい練習をするが試合は極めて少ない。日本の多くの生徒たちは16歳という年齢になって初めてスポーツらしいスポーツをやり始める。3年以上地方（長崎県）の高校のコーチを経験していて最も腹立たしかったことは、高校で初めてラグビーをする生徒が大勢いることである。その生徒たちがラグビーのスキルを理解する早さには非常に驚かされるが、ゲームを理解する能力は非常に劣っている（傍点は筆者）。

このことは、前述のグリーンウッドが20数年前に日本ラグビーの練習方法の弱点であると痛烈に批判したこと、すなわち、「練習におけるプレーヤーの活動量が大きいことに感銘を受けたが、練習中に（ゲームの中で）考えることがなされていないので、予期せぬ事態に対しては無力であり、ゲームの中で起る様々な状況に対する判断力と柔軟性が身についていない」<sup>24)</sup>と指摘したことと同じような印象を、パットンもまた受けたものと考えられる。

そして最後に、全国高校ラグビー選手権大会において戦後初の4連覇の偉業（2001～2004）を達成した大阪地区（啓光学園）の強さに触れつつ、とくに中学校に対する希望を述べている。

I think there is a direct link between high school teams from Osaka being consistently successful in the National High School Tournament in Hanazono and the fact that so many of those players had been playing rugby since elementary school.

.....

What I would like to see happen in Japanese Junior High Schools, is rather than students

22) マイケル・パットン、前掲書、p.3.

23) マイケル・パットン、前掲書、p.3.

24) ジム・グリーンウッド、前掲書、p.29, 1980.

choosing only club activity, they have to play a variety of sports or a least have an introduction to a variety of sports. I understand that this would be a very difficult thing to change and it would of course mean that teachers would have to become more adaptable too. Then, when these students graduate to High School, they can specialize in the sport they liked the most, and are not playing the sport for the first time.<sup>25)</sup>

花園ラグビー場で行われる全国高校ラグビー選手権大会において、大阪の高校が常に成功をおさめているのは、そのチームの多くの選手が小学校からラグビーを始めていることと直接関係があるように思う。

.....

私が日本の中学校に、生徒には1つのスポーツだけでなく様々なスポーツを体験させ、最低でも入門的（基本的な技術）なことだけは学ばせて欲しい。これが難しいことは分かっているが、この時期に多くのスポーツを体験することにより高校生になって自分が好きで興味のあるスポーツを選択することができる。

今後の一つの方向として、学校中心のクラブ活動のあり方を再検討する中で、徐々に芽生えかけている総合型地域スポーツクラブと学校・行政との連携について十分議論し、地域に根ざした具現化可能な方策を期待したいものである。

#### 1) ユース／ジュニアラグビー（小学校と中学校）

パットンは自己の体験に基づき、日本の地方における小・中学校のラグビー指導に対するコーチングの貧弱さ、未熟さを訴えるとともにこの時期の望ましいコーチング方法について以下

のように書いている。

... Secondly, young players should be taught how to enjoy rugby, with absolutely no pressure to win. This is what I mean by the correct environment for learning. If players are coached badly, shouted out when then make mistakes and taught a win at all costs attitude, then they are not likely to continue rugby to an older age.<sup>26)</sup>

幼いプレーヤーには、勝つことに対するプレッシャーを一切感じさせずに、ラグビーをどう楽しむかといった観点で指導することが重要である。それが学習の場で正しい環境であると考えている。もし幼いプレーヤーが下手なコーチングをされ、ミスすれば怒られ勝つことだけを教え込まれたなら、彼らはラグビーをしなくなるだろう。

パットンは、幼いプレーヤーにはまずいかにしてラグビーを楽しませるかということを第一義的に考え、指導することの大切さを強調している。そして彼は、地方（長崎県）とアイルランドのユースラグビーの比較について下記のように言及している。

My experience of youth rugby in Nagasaki is that most of the coaches at youth level do it on a purely voluntary basis. Indeed, some of these coaches are excellent coaches. However, if those coaches decide to stop coaching, there is no structure in place to ensure that youth rugby continues to thrive. Furthermore, these coaches get no financial or coaching assistance from the Nagasaki Rugby Union.

In Ireland, youth players playing rugby for the

25) マイケル・パットン, 前掲書, pp.3-4, 2000.

26) マイケル・パットン, 前掲書, p.4, 2000.

first time will be giving small rugby ball or a T-Shirt to try and interest them in playing rugby. Rugby clubs will be given balls and equipment for playing by the Irish Rugby Football Union. Coaches also will be given training wear and wet weather wear to assist them in doing their job. However, most importantly of all, the Irish Rugby Football Union will send Rugby Development Officers to assist these coaches with practice. So important is this area of rugby education that the IRFU employs around 40 development officers for a population of 7 million people, not all of who play rugby.<sup>27)</sup>

私の長崎県でのユースラグビーの経験から言えば、ユースレベルを指導している多くのコーチは完全にボランティアである。中には優秀なコーチもいるが、ボランティアで行っている以上将来的にユースラグビーをより発展的に普及させていく保証がなく、しかもこれらのコーチ陣は金銭的な援助を長崎県から全く受けていない。

アイルランドでは、初めてラグビーをする幼い子供たちに、小さなラグビーボールやTシャツを与え、ラグビーに興味をもたせる努力をしている。コーチにもトレーニングウェアやグラウンドコートが支給される。最も重要なことは、コーチをアシストするためにアイルランドラグビー協会がラグビー・デベロップ・オフィサー (Rugby Development Officer) を雇い、彼らを派遣していることである。

パットンの指摘しているユース・ジュニアレベルにおけるラグビーの指導体制の不備は、長崎県だけでなく他の都道府県においても同様である。また、他のスポーツ種目についてもラグ

ビーに類似した指導体制で実施されているのが日本の現状であろう。

このような日本的指導体制に対して抜本的対策が急がれてはいるものの、現代日本には少子化現象、スポーツ離れ、顧問離れ、をはじめ、実施スポーツ種目の多さ、慢性的な設備・施設不足、指導者不足、スポーツに対する社会的価値観や理解度、など実に多くの解決すべき問題が山積している。現状ではきわめて困難な状況にある。

ちなみに、平成14年度九州協会加盟会員数を一覧表で見ると長崎県のユースレベルのチーム数は福岡県に次いで2番目であるが、数字上は決して多くはない。しかしここ2年間、全国ジュニアラグビー交流大会のラグビースクール部門において九州勢が連続して優勝しているという事実から、中学生部門で優勝している近畿勢を除く他のブロックの指導体制を含む組織的な体制の不備がうかがい知れる。

## 2) 高校ラグビー

パットンは日本の高校ラグビーのレベルが確実に高くなってきていると考えている。そして、生徒の体格が10年前より大きくなっていることが今後の日本のラグビーに資するものと指摘している。技術的な面でも能力が高くなりつつあると考えているが、日本の高校ラグビーに影響を与えるいくつかの根本的な問題の存在について次のように言及している。

### a) コーチング

It is the same in every country, but it is usually follows that the best teams have the best quality coaches. This is even more apparent in Japan, because there is such a big gap between the best and worse coaches. The problem is exacerbated by the Japanese system of

27) マイケル・パットン, 前掲書, p.4, 2000.

‘tenkin’. There are not so many good coaches in Nagasaki, but it is possible to be transferred to an island or even a school, which doesn’t play rugby for up to seven years. I have always thought that this is such a waste of talent. Another problem is that often a teacher is made coach of team, but he is in fact not a rugby coach and therefore is totally unsuitable for the job. In such cases, I believe the Japanese educational system is failing its students.

This situation could improve dramatically, if the Japanese Rugby Union produced coaching manuals and if each prefecture’s rugby union provided quality coaching courses for teachers.<sup>28)</sup>

どの国にでも同じことが言えるが、トップレベルのチームには優秀なコーチがいる場合が多い。この点について日本の場合はいずれより鮮明である。すなわち優秀なコーチとそうでないコーチの間には大きなギャップがありすぎる。そしてこの問題は日本の“転勤”という人事システムによって一層悪化されている。長崎県には多くの優秀なコーチがいるわけではないが、そのようなコーチが長崎県に数多く点在する島やラグビー部のない学校に7年間ほど転勤させられる可能性はある。私はいつもこの“転勤”という人事システムがコーチの能力を無駄にしていると思う。そして他にも問題はあつた。それは体育教師がコーチをすることが日本では多いが、中にはラグビーを専門的にやってきたコーチでない場合もあり、それゆえにそのような人はコーチには不適切である。私は、このような日本の教育システム

が生徒達を駄目にしていると考える。日本ラグビー協会がコーチングマニュアルを作成し、各都道府県のラグビー協会がそれぞれの教師のために質の高いコーチングコースを提供することができれば、このような状況は劇的に改善される可能性がある。

b) 誰にも与えられない平等な機会

パットンは、優秀なラグビー選手<sup>29)</sup>は当然優秀なコーチのいる学校を希望するため、強いチームと弱いチームとの差は広がる一方であり、このような状況が長期的に継続されると関連する都道府県の全体レベルを下げることになりかねないと指摘する。そして、九州の佐賀県を例に以下のように言う。

... For example, in Saga-ken, there is a very strong team called Saga Kogyo. They are always strong at Hanazono, because they recruit the best players, but they have no competition in Saga and the reality is that high school rugby in Saga is weak.<sup>30)</sup>

... 例えば、佐賀県には佐賀工業高校というたいへん強いチームがある。このチームは中学校から優秀な選手を引き抜くために全国大会では常に強いが、佐賀県では他の追随を許さず、現実には佐賀県の高校ラグビーは弱い。

確かに佐賀県の場合、九州ラグビーフットボール協会に加盟している高校チーム数は4校である。しかも佐賀工業高校を除く3校は部員数15名に満たない状態が続き、やっと15名を少し超える人数になつても全国大会への県予選の決勝では佐賀工業高校と対戦して200点もの差

28) マイケル・パットン, 前掲書, p.5, 2000.

29) ここで言う優秀とは中学でラグビーを体験した能力の高い生徒だけではなく、他のスポーツ種目においても能力の高い生徒と理解される。

30) マイケル・パットン, 前掲書, p.5, 2000.

がつくミス・マッチが現在も続いており、一貫した強化施策に対する深刻な問題が生じていると言えよう<sup>31)</sup>。

パットンは九州の他県における強化施策面の不備についても、非常に鋭い視点と洞察力で批判している。

Many high schools' rugby clubs also don't have enough players to make up a team and yet they continue to practice every day. However, what is so sad is that those players will be unable to play in tournaments and there is a chance that many of these players will stop playing rugby because it wasn't enjoyable.<sup>32)</sup>

多くの高校ラグビー部では1チーム（15名）を構成することが非常に難しくなっている。しかしそれにも拘らず、毎日練習が行われている。悲しいことには、このような学校の選手たちはトーナメントでプレーをすることができず楽しくもなく、それが理由で辞めてしまう選手もたくさんいる。

これに対し、パットンは自らの実績をもとに意見を述べている。それはかつてコーチをした長崎北陽台高校<sup>33)</sup>のラグビー部の練習方法に関してであり、多分にアイルランド形式のコーチング方法をイメージしたものだと考えられる。パットンは次のように言う。

At the high school in Nagasaki, where I now coach, every player is treated the same and everybody practices together. Whenever possible, either in practice matches or at camp,

every player will get the chance to play rugby. Having said that, there are of course times when the practice matches involve only one team. Wouldn't it be so much better if every school had two or three teams all playing matches. At some practices I have watched at other schools, I have noticed that the first year students don't really practice at all, rather the hold tackle bags for their senpai or simply watch practice. What is the enjoyment in doing that? In Ireland, most players would stop after one week if that was the situation. Another problem with only having one team is that conceivably a player with not as much talent as others could practice everyday for three years and never play a game of rugby.<sup>34)</sup>

今、私がコーチをしている長崎の高校では、全部員が同様に扱われ、全部員と一緒に練習する。そして、できるだけ全部員が合宿や練習試合でプレーできるよう機会を与えている。そう言ってみても一つのチームしか練習試合に参加できないこともある。全ての学校で、すべての選手が練習試合に参加できるようになればどんなに素晴らしいことか。ある高校で見た練習では、1年生はまったく練習に参加できず、先輩のためにコンタクト・バックを持ったり、ただ練習を見ているだけだった。そんなことをしていて楽しいのであろうか？アイルランドでは、もしそのような状況に選手が置かれたならば、1週間でラグビーをやめてしまうだろう。一つしかチームがないというもう一つの問題点は、才能のない選手は3年間毎日練習をするだけで、一度も試合に出

31) 三神憲一他：“滋賀県下におけるラグビー選手の体力と健康に関する研究”，滋賀県体育協会スポーツ科学委員会紀要（財団法人滋賀県体育協会），No.19・20，p.34，2001。

32) マイケル・パットン，前掲書，p.5，2000。

33) 長崎北陽台高校は県内屈指の進学校でありながら過去に全国大会で準優勝を果たすなど、全国的に見てもレベルの高い高校の1つである。

34) マイケル・パットン，前掲書，pp.5-6，2000。



場できないことがあるということである。

パットンの言っている練習やゲームにおける機会均等の重要性は、単に佐賀県の事例にとどまらず他の都道府県にも共通する問題であるとともに、ラグビーの練習方法・ゲームの在り方に対して将来を見据えた積極的な方向転換や改善が焦眉の急であることを示している。

紙幅の関係で、これまで検討してきたことをまとめてみよう。

ジム・グリーンウッドが「これだけ熱心に練習に参加しても、試合に出られるのは、ほんの一握りの1軍の選手だけ...日本独特の集団(チーム)帰属意識——個人よりも集団が先行する——は西欧人には全く理解しがたい」<sup>35)</sup>と痛烈に批判し、その後20数年を経て来日したマイケル・パットンもまた同様に「1年生は全く練習に参加できず——コンタクト・バックを持ったり、ただ見ているだけ...そのようなことの何が楽しいのであろうか?...アイルランドでもしそのような状況に選手がおかれれば、1週間でラグビーをやめるであろう」<sup>36)</sup>と批判したことに、彼らのやり場のない強い怒りと無念さをうかがい知ることができる。彼らの目には、日本ラグビーの集団優先主義に立脚した練習方法・強化施策・ゲーム回数不足・機会均等性の欠如などが、ラグビーという伝統的スポーツに対する日本独自の誤った自国内的解釈の根強い継承の結果と写ったのではないだろうか。

本来、ラグビーのような伝統ある外来スポーツ文化を受容する場合には、そのスポーツの持つ本質的な部分<sup>37)</sup>に対してきわめて慎重な議論や吟味・検討が不可欠である。しかし日本では、多くが課外活動の場に導入され、目に見える形

式的な側面のみを重視するといった便宜主義や現実主義の方法を取らざるを得なかったという歴史的背景がある。そこには当然スポーツに対する価値観や意識をはじめ、社会習慣、教育システムなど、さまざまな面における彼我の相違があるだけに一概に善悪を判断することはできない。

しかし、パットンらの厳しい指摘は、グローバル的な視点からみた日本ラグビーのさらなる発展のためのきわめて重要な問題提起であると考えられる。

## おわりに

来日した滞在期間が浅いにもかかわらず、パットンが地方(九州)から観察した当時の日本のラグビーに関する指摘には、日本ラグビー全体の方向性を示唆する貴重な意見が多々含まれている。本稿では、『JAPANESE RUGBY』の高校ラグビーに関する章(“Opportunity For All”)までを検討したが、ここで得られた結論を以下に集約する。

- ① 日本ラグビーの将来のためには、アイルランドをはじめとする世界の強豪国が作成しているコーチングマニュアルを十分参考にして、発育段階に応じた組織的、かつ一貫性のある日本独自のコーチングマニュアルを早急に作成する必要がある。
- ② 運動クラブのあり方の改善は、彼我の学校教育カリキュラムの根本的相違(正課教育と課外教育)によりきわめて難しいものがあるが、ラグビーの練習方法・強化施策・ゲームの回数不足と参入形態・機会均等性の欠如等の問題においては、スポーツの原

35) ジム・グリーンウッド, 前掲書, p.28, 1980.

36) マイケル・パットン, 前掲書, p.6, 2000.

37) 例えば、マス、ストリート、時にはボフとまで呼ばれていた粗野で荒々しい民族的フットボールが、幾度もの禁止令にめげず、数百年という長い年月を経て近代スポーツへと発展してきた民族・歴史・風土的特性や思想性といったもの。

点である“楽しく、おもしろく、興味がある”ものにするために何を第一義的なものとするかを再考する必要がある。

他のチームスポーツ種目と同様、日本のラグビーにおける集団優先主義的な練習方法に、後代へ継承すべき貴重な内容も多分に含まれているのは確かである。しかし、チームという集団が自律的によりよく機能していくためには、個の尊重ということに配慮せねばならない。これからの日本ラグビーを展望すると、追い風として2016年のオリンピック種目に7人制ラグビーの復活が決定、加えて2019年には念願であったラグビーワールドカップの開催が決定した。しかしながらこれらのイベントに対しても、強化施策をはじめ集客力、施設面の環境整備、拠出金などの課題点も見えてくる。それ以上に少子化や運動クラブ離れなどに基因するラグビー競技人口、競技チーム数の深刻な激減状況に直面している現状を真摯に受け止めなければならない。日本ラグビー協会を基軸に、メディア、文部科学省への働きかけ、各都道府県との協力のもと、底辺部の普及・育成を重点とした具現可能な施策を早急に模索・検討する必要がある。

## Japanese Rugby Observed by Irish Rugby Coaches Examining Michael Patton's writings

Kenichi Mikami  
Jun Mizohata  
Shizuka Michikami

Just around 40 years ago, Jim Greenwood, who were a professor of Loughborough University and successively served as a captain for the National Scottish Rugby Team, was invited by Tsukuba University to teach as a visiting professor. In his report titled “Japanese Rugby in the Flesh,” he harshly criticizes the training methods of Japanese university rugby teams as well as their lack of training equipment and facilities when compared to world-class rugby teams. His stark criticism was also due to the major culture shock he experienced concerning the Japanese concept of group mentality, in which group interests must always come before the individual. Roughly 20 years later, Michael Patton was invited to serve as a special coach for the Mitsubishi Heavy Industries Nagasaki Rugby Team. Back in the nineties, Patton was active on the international stage, as both a top professional rugby player and coach. Compared to Greenwood's work, which mostly involved examining university rugby teams based in the Kanto area (central Japan), Patton's analysis is primarily based on his experiences with high school rugby teams located in the regional area of Nagasaki in Kyushu (western Japan). Patton stresses the urgency of creating distinctive coaching manuals for each grade level. He keenly observes that the traditional sport of rugby has been ineffectively remade in Japan as can be seen in its: (1) training methods, which are based on group mentality, (2) lack of matches played by the team and (3) lack of equal opportunities afforded to each player. As this Japanese version of rugby continues to prevail, Patton urges both coaches and players to return to the basics and reconsider the quintessence of team sports (including rugby), which should ultimately be fun, enjoyable and interesting for everyone involved.